

= 守るべきもの =

3月下旬、東京では気温20度前後の日が続いた。桜の花は咲き誇り、早いところでは葉桜となっているところもある。散りゆく花をめながら、仲間や家族と一献、そんなことが遠い昔のように感じられる今年の春。残念ながら、歩きながら、ジョギングしながらの花見、「…ながら鑑賞」で我慢・がまん。

ところで、鑑賞は鑑賞でも映画の話の少し。観たいみたいと思いつつ、コロナ感染の危惧等もあり、とうとう映画館に足を運ぶことができずにあきらめていた映画“Fukushima 50”が3月12日にテレビで放映された。

東北地方太平洋沖地震による地震・津波の影響により東京電力の福島第一原子力発電所で発生した原子力事故。想像を超える被害がもたらされた原発事故の現場、そこに留まり奮闘し続けた約50人の作業員たち。海外メディアから“Fukushima 50”と称された彼らの姿を描いたヒューマンドラマである。

逆境の中で究極の選択を迫られる現場、そこにおかれた指揮官とメンバー。官邸や本社との認識や意見の食い違いの中で、誰よりも原発を熟知しているプロたちだからこそ、地域に思いを馳せつつ、現場を守ることに命を懸け、家族に別れのメールを送り最前線へ向かう。組織の在り方やリーダーの指導力、そして一人一人が持つ仕事に対する誇り、この未曾有の事故を美化するつもりはないが、ものづくりの現場にも通じる神髄を見た気がした。

ご存じのとおり、その事故の後、原発周辺はあちこちの道路、家屋の前に「帰還困難区域につき・・・」という標識が置かれ、すぐそこにあるのに我が家に帰れない人たちがいた。2018年5月に福島第一原発を視察する機会をもらい発電所の中へ。1号機から3号機のすぐそば、目に見えない放射線の怖さもさることながら、爆発した建屋を目の当たりにした時には言葉も出なかった。

今も原発事故現場では多くの方々が廃炉に向けて懸命の作業を続けている。当時、東京電力では、750名が単身赴任し業務にあたっていたという。その事務所建屋の壁には、協力企業名が掲げられ、その中に三菱重工、IHI、神戸製鋼グループ、山九という私たちの仲間が働く社名もあった。決してあってはならない事故であることは言うまでもないが、次に向けたあらゆる努力を多方面で進められているという事実を私たちは意識しておかなければならない。放射能問題も「正しく理解し、正しく怖がる」ことが大切。そして地域の産業発展のためにも心ない風評被害には毅然と対応していかなければならない。

一方、一年を超えたコロナ禍、多くの産業・企業がもがき苦しんでいる。とりわけ出張や帰省の際にお世話になっている航空業界では、便数の激減等で生活にまで影響が出ている。春闘交渉すらままならない状況の中で、客室乗務員の皆さんは搭乗便数で額が決まる乗務手当や距離手当が4割を占める給与体系から、足もと20万円に満たないケースも多いという。

そんな中で出向や慣れない職種への応援など、自らの企業と働く職場を守るために懸命の努力が続けられている。きっと、その想いの奥には国民の足を守るという大きな誇りをむねに…、心からエールを送りたい。

基幹労連の各産業・企業に働く仲間も形こそ違え、経営施策に対するギリギリの努力を続けていることを承知している。私たちの仲間は、自らの暮らしを、働く職場を守るために、そして産業・企業の持続的な発展のために、身を粉にして挑戦し続けている。その姿はきっと、かの映画の登場人物たちをも彷彿とさせるはずである。

わが身を守り、家族を守り、仲間を守る。そして、働く職場を守る。まだまだ先は見えないが、新年度の始まり。互いにエールを送りながら歩を進めよう。

ご安全に

2021年4月1日

日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一